

志津川湾保全・活用計画（素案）パブリックコメント

	ご意見の内容（要旨）	ご意見に対する考え方
1-1	海洋資源の枯渇が懸念されることを鑑みて、未利用魚や廃棄処理されているような水産物の有効活用を取り組みとして入れていただきたいです。ワイズユースというような表現に括られてしまうのではなく、モニタリングや学会などアカデミックなところが具体案としている同レベルでの具体的な計画表現があればいいと思います。	未利用魚の利用とは、漁獲されたのに捨てられる魚のことと推察します。廃棄処理される水産物という意味では、どの段階でどのように発生するという実態を抑える必要があります。水産加工場レベルでは、使われなかった部位は肥料原料として売却するなど、すでに一定の取り組みがなされていると認識しております。漁獲段階での廃棄については、漁業資源の保全とワイズユースの概念の啓蒙をしつつ、漁業者との対話の機会を増やしていくことがまずは重要です。その上で、自主的な取り組みを促しつつ、地域で取り組む機運を高め、具体的な計画づくりへとつなげるべきと考えます。
1-2	同様の視点で、共有地である海の資源保全のための漁業権の理解も積極的にされる計画であってほしいです。	漁業権に対する理解と海洋資源の保全・活用は、関係はしますが別の視点の話かと思えます。地域の資源や環境の状態をしっかりと調べ、共有していくことで、漁業者や地域の事業者・住民の理解を深め、資源の保全についても具体的な検討ができるようになると思っています。
1-3	学会というアカデミックな取り組みもあるべきだと思いますが敷居の高さを感じ、地域全体が学ぶ雰囲気を作る表現・仕組みの工夫も必要かなと思います。子どもたちへの学びと同様に、一般市民が学ぶ仕組みがあつてこそその保全には不可欠な社会の変化を起こすことにつながるのではないのでしょうか。	おっしゃるとおり「学会」というと敷居が高いと感じる方もいらっしゃると思います。ワイズユースを実現するためのアカデミックな取り組みは必須ですが、もちろん一般の方々が学ぶ場があることもとても重要です。子ども向けの学びプログラムしかやらないと受け止められないよう、計画の表現を工夫します。
1-4	海での活動の際の安全管理向上と、海をテーマにして科学の大切さを啓発、科学的思考、探究力を育むような取り組みが、海洋保全の土台となる気がしていますので、その辺りの取り組みに言及が欲しいです。大学の誘致（臨海実験所のようなものか）もあるとは思いますが、その前に高校での”海洋”授業の取り組みがあつてもいいのではないのでしょうか。宇宙食となった鯖缶を作った福井県若狭高校の取り組みなどが、非常にいい事例のような気がします。	本計画のあそび・学びの項目は、まさに科学的な思考力を高めることを1つの目的としております。高校の授業については、一義的にはそれぞれの高校が決定するものですので、本計画に記載することが適切とはいえません。地域全体での取り組みを進め、気運を高めていくとともに、高校からの要請があつた場合に対応できる体制を整えていくことが重要と考えます。
1-5	漂着ごみの処理に費用がかかってしまっているのですが、評価指標としてこの処理費用を0とするのはどうでしょうか→量が減れば少なくなるし、費用をクローズアップすることで負担イメージを鮮明にできます。データも捉えやすい。そもそも処理代が掛からなくしてほしいということもあります。	評価指標とは、毎年計測可能なものとする必要があります。ボランティアなどによる漂着ごみの処理につきましては、行政による支援もございますので、事前に環境対策課にご相談頂ければと思います。
1-6	30p 2) 環境に負荷を～エネルギー生産 → 生産の間違いではないですか。	エネルギー生産は生物の代謝で使われる場合が多く、ご指摘のとおり、より適切なエネルギー生産にあらためます。

1-7	<p>総じて、取り組みの事がらが非常に明確に言葉とされているものと、内容がぼやけたものが混在していたり、湾の保全から少し遠いようなものが入っているように感じられたりと（例えばインターンシップとかオカルトとか）、計画の体系としての整然さがもう少し欲しいのと、それと共に取り組む内容に湾の保全との相関性が高いものとしての焦点の絞り込みが必要ではないかと感じました。（何もかもが間接的には関係するという事は、わかりはしますが、計画としての明瞭化や現実化も重要と思います。）</p>	<p>本計画は、志津川湾の保全とともに、その賢い活用（ワイズユース）についても提案するものですので、保全のみに絞った内容とはなっておりません。計画の実現性についてご心配いただいていることと思いますが、社会や環境の変化の激しい中で、志津川湾のより良い保全・活用を目指す必要性から、関係者や住民が意欲を持って取り組んでいけることを優先しました。今後具体的な評価指標を詰めつつ、3年ごとの見直しでより実践的なものとなるよう改善に努めていきたいと考えております。</p>
1-8	<p>温暖化の抑制や海洋ゴミ対策、今後も可能性の高い感染症への対応のためには、エネルギーも含めた地域自律型の社会構造が求められるはずで、現在の貨幣経済構造・資本主義メカニズムを見直すことにもなると推察します。それが巡り巡って海洋保全、湾の保全につながると考えます。その観点から、グローバルマネーに頼らないローカルマネーのあり方の検討を視野に入れてほしいです。もしかすると基金の仕組みづくりにつながることなのかもしれませんが、基金という限定的な中央集中的な枠組みとせず、地域にスプレッドしやすいお金の流れづくりとする（ローカルマネーが流れる仕組みの中に、保全への取り組みが組みこまれ、保全資金も蓄積されるシステムか...）方が、啓発にもつながり、本質的な湾の海洋保全につながるのではと感じました。</p>	<p>基金等の具体的な内容は固まっておりますが、地域産品の売上の一部が湾の保全や人材育成に使われるなど、地域の中でお金がまわる仕組みづくりという点では、いただいたご意見に近いものとなると想定しております。</p>
2-1	<p>サステナビリティツーリズムの一環としての活用 サステナビリティツーリズムの国際認証GREEN DESTINATIONに申請し、環境だけではなく、観光業の持続性を実現し、南三陸のあらゆる産業（漁業、林業、観光業等）の持続可能な町に実現する。</p>	<p>観光業の持続可能性を担保する動きは、今後ますます高まってくると予想されま す。GREEN DESTINATIONの認証に参加するのも1つの手段かと思いますが、その具体的 な取り組みや施策について本計画のみで言及できるものではありません。内容的 には志津川湾のワイズユースにマッチするものですので、観光に関わる事業者や行政 の観光担当部局との連携をとりつつ、検討していくべきものかと思ひます。</p>
2-2	<p>バイオマスを着目し、エネルギーの地産地消とカーボンの循環の実現 海洋のバイオマスが詳しくないが、現在鳴子での木質バイオマスのまちづくり のように、8割の森林を管理しながら発生した間伐材を活用し、エネルギー に変換し、地域に提供する。さらに、森林の管理による海洋への影響も モニターし、森林管理の効果がわかれば、森林管理の推奨と木質バイオマス によるCO2削減にも役に立つ。さらに、光熱費が高い南三陸町の住民たちに メリットがある。</p>	<p>おっしゃるようにカーボンニュートラルの実現に向け、様々な施策を行っていく必要 があります。南三陸町バイオマス産業都市構想のアップグレード版の提案の中 で、いただいたご意見についても検討すべきものと考えております。</p>